

## 愛と人種のダブル・バインド

——ウィリアム・フォークナー『アブサロム、アブサロム!』におけるローザ・コールドフィールドの役割——

萩 埜 亮

### 序

ウィリアム・フォークナー（William Faulkner）の最高傑作にして、最も実験的かつ技巧的な作品であるとされる長編『アブサロム、アブサロム!』（*Absalom, Absalom!*）は、その実験性ゆえに、作品における語りや歴史の「真実」が常に批評上の論点となってきた。とりわけ、トマス・サトペンという、南部共同体において半ば神話化された存在をめぐる複数の人物による回想において、それぞれの語り手の主観的な物語と歴史の客観的真実とがどのように纏れ合っているのか。そして、そのような高度に錯綜した構造が、作品のテーマとしての「南部」を語る上で、どのような役割を果たしているのかといった問題は避けては通れないものである。

なかでも語り手の一人、ローザ・コールドフィールドはしばしば重要度の低い語り手と考えられてきた。物語の中心がサトペンとその息子（たち）にある以上、唯一女性の語り手であるローザの役割は、副次的であるか、周縁的なものとして扱われてきたのである。<sup>(1)</sup> その理由の一つは、彼女が『アブサロム!』の謎の核心部（ボンがサトペンの息子であり、彼に流れる黒人の血ゆえにサトペンは彼を否認し、ボンは腹違いの弟ヘンリーによって殺されることとなった）についてなんら知るところのない人物である、という点に求められるだろう。<sup>(2)</sup> しかしながら、サトペン物語に自発的な興味を抱いていないクエンティンを探偵役として召喚し、なかば強制するような形で真実の発見へと誘うのは、ローザである。読者もまた、作品の冒頭からローザの異様な語りによって、神話的で謎めいたサトペン物語へと引き摺り込まれることを想起すれば、エリザベス・ミューレンフェルド（Elisabeth Muhlenfeld）が述べるように、ローザこそが「主要なキャラクターであり、小説に欠かせない存在であり、サトペン物語を考えるよう強制する触媒」であると見做すことも可能だろう（250）。

本論は主に『アブサロム!』第一章および第五章におけるローザの語りを分析することで、彼女のロマンティックな幻想とサトペンによる侮辱というトラウマ的な体験がどのように結びつくのかを明らかにし、それによって、フォークナーがローザという語り手を設置し、クエンティンをその聴き手として配置したことが如何なる意味を持つのかについて考察したいと思う。

## 1 クライティによる接触とボンの死

小説のちょうど中間地点である第五章において展開する全編イタリック体で綴られるローザの独白は、作品が扱う時間軸においてもちょうど折り返し地点にあたる、南北戦争終結直後のヘンリーによるボン殺害の日（一八六五年）から始まる。<sup>(3)</sup> 物語的にも、南軍の敗北とボンの殺害という、核心部に当たる部分なのであるが、ここでは象徴的なことに、二つの領域を区分する境界＝ドアが描かれている。「私はこだまを聞きましたが、銃声は聞きませんでした。閉じられたドアを見ましたが、中には入らなかったのです」（AA 121）とローザが語るそのドアの向こうには、ヘンリーに銃殺されたボンの死体と、「結婚する前に寡婦となった」（AA 110）ジューディスの姿があるはずだった。というのも、若きローザを惹きつけたロマンスの悲劇的結末は、彼女がドアを開けて確かめるよりも前に、一本の黒い腕に妨げられてしまうからである。それはサトペンが名もなき黒人奴隷との間に儲けた混血の娘、クライティの腕である。

*'Dont you go up there, Rosa.' That was how she said it . . . 'Rosa?' I cried. 'To me? To my face?' Then she touched me, and then I did stop dead. Possibly even then my body did not stop . . . I do not know. I know only that my entire being seemed to run at blind full tilt into something monstrous and immobile, with a shocking impact too soon and too quick to be mere amazement and outrage at that black arresting and untimorous hand on my white woman's flesh. . . let flesh touch with flesh, and watch the fall of all the eggshell of shibboleth of caste and color too. . . I crying not to her, to it; specking to it through the negro, the woman, only because of the shock which was not yet outrage because it would be terror soon, expecting and receiving no answer because we both knew it was not to her I spoke: 'Take your hand off me, nigger!' (AA 111-12, underline mine)*

クライティとの身体的接触は、ローザの激しい人種意識を呼び覚ます。ミンローズ・C・グウィン（Minrose C Gwin）は、クライティがローザを女性として対等に扱おうとしたのに対し、ローザはクライティを人種的＜他者＞と見做し、白人意識をむき出しにしていると指摘する（Black 111）。引用部分とは別の箇所、クライティが「だれよりも私に礼をつくし敬意をはらってくれた」（AA 111）ことをローザが理解しているように、この差別意識がクライティ個人に向けられたものではないという自覚は、それがむしろ社会的な規範を内面化したものであることを示している。

むろん、子供のころからクライティの触れたものにさわろうとしなかったと自ら語っているように（AA 112）、南部に生まれたローザがここで初めて人種差別主義者に変化したというわけで

はない。クライティによって腕を掴まれる、という肉体的接触によって、ローザは自分とクライティとの間の人種的違いなど、二人の人間としての同質性に比べればもろくも崩れ去ってしまうものであることを、強制的に感覚させられてしまった。ローザの激しい人種意識は、この肉の接触が教える確かさを打ち消すために、自意識の必死の抵抗として強く叫ばれるのだと考えられよう。

『アブサロム！』第五章の主題は、(後述するように、その可能性をローザ自身が否定しているにも関わらず)「愛(ロマンス)」であると言っても過言ではないだろう。ローザの「恋愛のディスクール」とでも呼ぶべき章の冒頭において、上述のような人種的葛藤が置かれていることはいかなる意味をもつのだろうか。以下、ローザの語りを分析しながら、愛のディスクールと人種のディスクールがどのように交接するのかを明らかにしてゆく。

ローザは、自ら「私は青春を……女として娘としてではなく男として生きたのです」と述べるように、ジェファソン共同体においてロマンスの構造から排除された青春時代を過ごしていた。それは彼女の家庭環境が強いた孤独のためでもあるのだが、他方でそのような孤独の中で「あのいわゆる女の勝利と呼ばれる宿命」を待ち望んでいたローザは、自分自身の抑圧された女性性を認めながらも、それを(彼女より四つ年上の)姪、ジューディスに仮託することで間接的にロマンスの世界へと参入しようとする(AA 116-7)。

「男のだれひとりとして二度と——あるいはけっして——目もくれようとしなかった私が、花開いていたとは申しません」と述べるローザは、女性性を蝶や花の比喩で表現し、オールド・ミスの彼女を絶えず反自然的なものとして表象するミソジニックな南部共同体の言説(その代表はコンプソン氏の語りである)を受け入れている。と同時に、「しかしわたしにも根や衝動はあったのです。わたしといえど蛇の誘惑に負けたイブ以来の、すべての夫なき女の後裔なのですから」という形で、その(ミソジニックな言説が好んで用いる)植物的な比喩によって自分を「女性性」に接続する手付きに明らかなように、ローザは南部ロマンスの男性中心主義的なパラダイムに抵抗するのではなく、その内側で自らの恋のナラティブを紡ごうとする(AA 115)。「ローザ・コールドフィールドは……恋する登場人物であり、自分の欲望を限りなく再構築し、同時に恋の相手を脱構築しつつ物語を語ることによって、自らの苦痛を嘆き、その情熱を保ち続ける」とリンダ・S・カウフマン(Linda S Kauffman)が喝破したように(243)、ボンに対する恋慕を「見たこともない人を、どうして愛することができますか？」(AA 118)と述べて絶えず標準的な「愛」の言説から差異化するローザは、南部的なナラティブにおいて自己を正当化できないという抑圧の働きを内面化しながらも、逆説的に彼女なりのロマンスを言葉に紡いでいるのだ。

このようにローザの愛がその不可視性を前提としていることは重要である。なぜなら、「ローザがボンを愛せるのは、彼の不在が彼を獲得不可能にするからに他ならない」(Matthews, *Play* 126)と言われるように、ボンの不在は彼女をよりいっそうロマンティックな世界へ導くのであ

り、それゆえにサトペンがジュディスとボンの結婚を禁じてボンがヘンリーと姿を消した後も、ローザはジュディスのための結婚衣装を縫い続けていたのだし (AA 63)、それは彼女自身の「嫁入り道具」でもあるのだ (AA 120)。

ゆえに、ローザが一度もその姿を目にしないうちにボンが死に、クライティが引き止めたドアの向こうあったその死体さえも垣間見ることなく棺へ収められたということは、結果的に彼女のロマンスを「生き永らえさせる」こととなる。本章冒頭でも確認したように、ボンの死は『アブサロム!』における決定的瞬間であり、それは南北戦争の終結すなわち南部にとっての敗戦という歴史の節目と時を同じくするという点においてもっとも顕著なのであるが、現実へと目覚めることなく夢を見続けるローザにとって、敗戦は過去と現在の断絶というよりも、現実のより一層の幻想化として映ずる。

*[... While the stable world we had been taught to know dissolved in fire and smoke until peace and security were gone, and pride and hope, and there was left only maimed honor's veterans, and love. Yes, there should, there must, be love and faith ... love and faith at least above the murdering and the folly, to salvage at least from the humbled indicted dust something anyway of the old lost enchantment of the heart. (AA 120-21)]*

「知るべきものとして教えられてきた堅固な世界」の崩壊という時の経過は一応感じられるが、その廢墟から「遠い昔に失われた、かつて人の心を魅了したなにか」を救い上げる「愛と信頼」という普遍的な観念に明らかなように、社会から疎外された少女にとって、南北戦争の意味は、非時間的・非歴史的なものとして理解されざるを得ないのである。

## 2 サトペンによる侮辱

ローザはボンの死を「長ったらしく繰り返されるアンチクライマックス」(AA 121)に過ぎないとして片付けてしまうのだが、彼女にとっての「決定的瞬間」はまさにアンチクライマックスとして、サトペンによって遅れて与えられる。それはサトペンからの婚約の申し出を受けた後に受けた、ローザの南部ロマンス的な幻想に対する汚辱である。ローザはこの経験を、「なにか腐った泥の塊みたいなものがわたしの生活に入り込んできて、それまで聞いたこともなければ今後二度と聞くこともないようなあんなひどいことを言ってまた出ていった」と語っているが (AA 138)、ここでは「泥の塊 (rotten mud)」によって汚されるという処女喪失的な言い回しの中に暗に仄めかされている「黒さ」に注意しておきたい。

サトペンがローザに言った「あんなひどいこと」とは、「ひとつ試しに子供を産んでみてもし男の子だったら結婚しよう」というものだったとシュリーブによって推測されている (AA 144)。

婚約の際には「結婚指輪」を渡し頭に手を置くという「紳士の」な手順を踏んだサトペンの申し出を受諾したローザが、この提案をもちかけられた際に受けとった侮辱の意味を、諏訪部浩一は次のように分析している。

サトペンは——頭に手を置かずに——この「提案」をすることにより、性的な<他者>として突然ローザの前に立ち現れる。ローザの性的<他者>との初の邂逅は、人種的<他者>との邂逅に劣らず、不運な形で彼女を不意打ちする。「ドア」の後ろに長らく孤独に佇んでいたロマンティックな南部少女には、結婚という因襲的な制度の助けもなしにそのような生々しい「現実」に直面できる準備など、まったく整っていなかったのだ。そして彼女は、「南部淑女」として「正しい」振る舞いをする——実家に駆け戻り、固く「ドア」を閉ざすのである。「彼女の孤独は、ボンに関するロマンティックな幻想を維持することを彼女に許すが、サトペンによる侮辱は、そういったロマンティックな恋愛観を彼女が持ち続けることを不可能にしてしまう」。もともと不在であったボンのケースとは異なり、この一件が彼女のロマンティシズムにとって痛烈な打撃であったことは想像に難くないだろう。(442)<sup>(4)</sup>

サトペンがローザの性的<他者>として彼女にショックを与えたことは間違いない。しかしながら、ここでさらに指摘すべきことは、この侮辱は人種的<他者>に劣らぬというよりも、性的なショックと同時に人種的なショックを呼び起こし、ローザを二重に責め立てているということだろう。ここでサトペンが「子を産む」という意味で“breed”という言葉を用いていること、そして馬を降りることなく馬上からローザに言葉を浴びせたことは、サトペンのローザに対する処遇がまるで家畜や奴隷に対するものと区別ないものであることを印象づける。既に確認したように、南部的な人種意識を育んでいるローザがこうした所作に無反応でいられるはずがないだろう。性的に無垢な幻想を育んできたローザにとって、サトペンの所作はそれがロマンスの約束事を見捨てているが故に、彼女を男に搾取されるだけの性的対象へと貶める。他方で、その同じ所作が、奴隷制における主人のものとしては「正しい」振る舞いであったがために、ローザは自分自身を黒人奴隷と同列の存在へと貶められた者として感ぜざるを得ないのである。

性的かつ人種的な侮辱——このことがローザに与える衝撃について考えるために、ここでコンプソン氏の有名な女性論を引き合いにだしてみよう。第四章において南部人ヘンリーが所有している然るべき（すなわち南部において普遍的とされる）女性観を説明するコンプソン氏は、女性性を三つの階層に分類する。

[Female sex] is separated into three sharp divisions, separated (two of them) by a chasm which could be crossed but one time and in but one direction—ladies, women, females—the

virgins whom gentlemen someday married, the courtesans to whom they went while on sabbaticals to the cities, the slave girls and women upon whom that first caste rested and to whom in certain cases it doubtless owed the very fact of its virginity. (AA 87, underline mine)

この明らかに女性差別的な分類は要するに、女性を性的な役割において階層化したものである。南部の紳士にとって淑女は神聖なる処女であるべし、という観念はフォークナー作品において頻出するが、<sup>(5)</sup> そのような処女性（性的に搾取される対象としての）黒人女性に依存していると述べるコンプソン氏は、白人男性による黒人女性の性的搾取によって成立する南部イデオロギーの闇について言及している。ボンの黒人性には奇妙なほどに無自覚なコンプソン氏がこのように気軽に黒人女性の性に言及できるのは、こうした事実を前にしても、女性蔑視と黒人蔑視という二重の差別によって守られた南部白人男性としての彼のアイデンティティはいささかも揺るがずに済むからだろう。『アブサロム！』における「人種混淆」の問題に顕著なように、南部において白人男性が黒人女性を性的に搾取することが「良心の呵責」を産むことはない。一方、白人女性は「性的」であってはならず、彼女らが「処女」として、「淑女」たりうるのは、男を誘惑する性を黒人女性に転嫁することに依っている。ローザのロマンスを支えているのは、このように性によって階層化された差別的な南部のロジックでもあるのだ。

ゆえに、サトペンがローザを（結婚すべき対象として処女性を守るべき）「淑女」としてではなく、子をもうけるための性の対象として扱い、さらに家畜や奴隷と同じように扱ったという事実は、（彼が処女性に何ら価値を見出さないがゆえに）「淑女 (lady)」と「女 (woman)」の（性的）差異を無効化するのみならず、そのように搾取される性としての「女 (woman)」と「雌 (female)」の（人種的）差異をも無効化することで、ローザのロマンスを二重の意味で破壊するのである。皮肉なことに、黒人の血を絶対的に忌避するサトペンの振る舞い（パフォーマン）は、ローザにとっては彼女を「黒人化」する記号として発話遂行的（パフォーマティブ）に機能していると言えるだろう。

だがそれでも、サトペンを南部的な美德をもたない「悪鬼 (demon)」としてほとんど神秘化し、他者化してしまえば、ローザは再び幻想の中に閉じ籠ることが可能はずだ。だが、第五章のほぼ全編にわたって独白するローザをつき動かしているのは、侮辱を受けた日から四三年間に亘ってひたすら繰り返される「なぜ、なぜ、なぜなの？」(AA 135) という問いなのだ。ローザにとって、サトペンの侮辱は彼女自身のアイデンティティを根幹から揺るがすものであった。そしてそれを理解するためには、単にサトペンが彼女のロマンティックな幻想を（他者として）一次的に「汚した」のではなく、永久に消えない汚れを植えつけたのだと考えるべきだろう。そして、結論から言えば、それは「泥の塊」という語が連想させる、南部における「黒さ」の問題な



のである。

### 3 ローザのダブル・バインド

このことを詳しく見るために、第五章以外の章も含めて、サトペンに侮辱されてからのローザの言動を分析しよう。サトペンに侮辱された日のことを、ローザは「希望と愛の死、誇りと信念の死」、「この四三年間ずっと生き続けてきたあの怒りと驚きに発した不信の念をのぞけばすべての死」がやってきた日だと述べる (AA 136)。この言葉は、ボンの死後、南北戦争を経て「愛と信頼」が残されたと語ったのと矛盾しているように思われる (AA 120)。実際、南北戦争を単なるアンチクライマックスだと考えていたボン殺害後のローザとは異なり、サトペンからの侮辱を受けた後のローザは、「敗戦」という事実徹底的にこだわっている。

Oh he was brave. I have never gainsaid that. But that our cause, our very life and future hopes and past pride, should have been thrown into the balance with men like that to buttress it—men with valor and strength but without pity or honor. Is it any wonder that Heaven saw fit to let us lose? (AA 13)

「哀れみや名誉のない男たち」のせいだ戦争に破れたとしても仕方がない、という非難は、彼女がサトペンについて繰り返し言及する「あの男は紳士ではありませんでした、とても紳士などではありません」(AA 9, 11) という言葉と結びついて、しかもそれが「男たち」に一般化されているがために、南北戦争以後、南部ロマンスの英雄的な美德がジェファソン共同体においては喪失したとローザが考えていることを示す。敗戦がいわば「サトペンの」男たちのせいだと非難する彼女は、新南部の「墮落」をサトペンという「異物」(「どこの馬の骨ともしれず、どこの生まれかも知ろうとしない男」[AA 13]) の侵入のせいだと考えているのである。サトペンがジェファソンにやってきて、エレンと結婚することでコールドフィールド家と関係を結んだことを、ローザは「南部と私たちにふりかかった宿命にして呪い」(AA 14) と表現する。

だが、ローザはただひたすら四三年間に亘ってサトペンを非南部人として糾弾し続けてきたのだろうか。実はこの「外から侵入してきた災難」について、ローザはそれが自分たち自身に由来するのではないかという疑問を抱いている。

Yes, fatality and curse on the South and on our family as though because some ancestor of ours had elected to establish his descent in a land primed for fatality and already cursed with it, even if it had not rather been our family, our father's progenitors, who had incurred the curse long years before and had been coerced by Heaven into establishing itself in the

land and the time already cursed. (AA 14)

『アブサロム!』の第一章を読み始めた読者がすぐに気がつくことは、サトペンに対する執着と平行して、ローザの語りはその初めから、南部にかけられた呪い、南北戦争に負けた理由というものに固執している、ということである。そして『アブサロム!』という作品を通読した読者ならば誰もがこのパッセージを読んで、その呪いを奴隷制、とりわけ白人男性による黒人女性の性搾取の結果としての「人種混淆」と結び付けるだろう。「この土地に定着を余儀なくされた、一族のものでも父方の祖先でもない人びと」という言葉から、強制移送された黒人たちの母方の血を想起せずにはおれないからだ。

ここでもう一度、サトペンの侮辱が孕む二重の含意に立ち返ろう。南部ロマンスを性的・人種的両方の価値観において破壊するサトペンをローザが否定しようとすれば、彼を非南部人＝非紳士として他者化しなければならない。だが、もし憎むべきサトペンが、南部の人種差別イデオロギーを共有しているとしたらどうだろう。ローザ自身の南部ロマンスが、(性的に搾取される対象としての黒人奴隷女性を「ニガー」と呼称しうる南部淑女として)たとえ無意識にであっても、人種差別的なイデオロギーによって支えられる必要がある以上、南部というパラダイムにおいてサトペンを批判すればするほど、彼女は自らを貶めたサトペンのイデオロギーと結託することになってしまう。サトペンを憎めば憎むほど、サトペンの的なならざるをえない、というダブル・バインドな状況こそが、四三年もの間ローザを全てが静止したような暗い部屋に、永遠の喪服姿のまま閉じ籠らせ、「なぜ」と問い続けさせているのではないだろうか。

#### 4 南部人としてのサトペン

サトペンが南部人であるかどうか、という問題に関しては様々な議論がなされてきた。サトペンが南部や人種主義と無関係であるとか、サトペンにとってそれが単なる成功上の方便にすぎない考えるのは、彼の「デザイン」への徹底した拘りや、サトペン神話と南部との関係性を著しく無視するものとなるだろうから、ゆきすぎた解釈であるとしても、結局のところ、サトペンの中にどれだけ「南部性」を見出すかは、批評家が南部という言葉にどれほどのものを読み取るかにかかっているとも言える。ここではあえてサトペンの個人史的な事情（それは主に六章以降で明かされる）についての考察は避け、むしろ彼のジェファソンへの侵入によって、彼自身の「デザイン」が要求する価値観と、ジェファソンの人びとの南部的無意識とでも呼ぶべきものが、本質的に一致する結果となることを指摘することで、ローザのダブル・バインドに読みの裏付けを与えたい。

クレアンス・ブルックス (Cleanth Brooks) が「憎しみの語り」(“The Poetry”199) と呼んだように、第一章のローザの語りは濃厚な主観性を漂わせていた。それにつぐ第二章の語り手は主



としてコンプソン氏である。しかし、第二章は冒頭で「1833年のあの日曜日の朝に教会の鐘がなりひびいたときと同じ空気のなかに生をうけ、いまなおその空気を呼吸している」クエンティンが「ほとんど彼が既に知っている」コンプソン氏の話を聞きながら思い浮かべる情景を、全知の語り手が三人称のまま代理描写する形で始まる。このことは第二章の語りがジェファソンの人びとが共有するナラティブとして、サトペンの侵入に動揺する当時の人びとの反応をほとんどそのまま伝えていることを示している。

サトペンに対する住人たちの最初の反応は敵対的なものである。彼らはサトペンが金儲けのために「ミシシッピの蒸気船を二丁拳銃で荒らす」強盗ではないかと勘ぐっているのだが、とりわけサトペンの異質性を際立たせるのが、彼が「ヴァージニアとかキャロライナより遥かに古い土地、それも穏やかではない土地から連れて来たらしい」(AA 11)、「野蛮な黒人たち」である。「彼らとサトペンがやりとりしている言葉はかたことのフランス語であってわけのわからぬ薄気味わるい土語ではないということを知らないでいる」ジェファソンの人びとは、黒人たちに魔術性や獣性を投影して気味悪がる。「泥を塗りたくって」黒人たちといっしょに働き、ときには裸で殴り合いをするサトペンの様子は、南部の白人階級にとって愉快なものではないだろう (AA 27-28)。

しかしながら、本章で注目したいのは、サトペンが「一文無し」の状態から邸宅を建築するために得た多くの富の出所と、そのために彼がコールドフィールド氏と行った「取引 (business)」(AA 38) についてである。コンプソン氏はこの時点でサトペンが町の「公の敵」となっていたことを指摘し、次のように語る。

I think that the affront was born of the town's realization that he was getting it involved with himself; that whatever the felony which produced the mahogany and crystal, he was forcing the town to compound it. . . . [N]ow his position had changed, because when, about three months after he departed, four wagons left Jefferson to go to the River and meet him, it was known that Mr. Coldfield was the man who hired and dispatched them. (AA 33)

コンプソン氏の解釈が正しければ、町の人びとがサトペンに反感を抱いたのは、コールドフィールド氏という町の道徳心の象徴のような人を引きこむことで、「町の人びとがその重罪を、否応なしに見逃さざるをえないようにしようとし」、町の道徳心を公然と汚したためである。ここで問題になっている「重罪 (felony)」が何であるかはテキストにおける有名な謎の一つである。コンプソン氏の語りではせいぜい「蒸気船強盗」が想像されるくらいだが (AA 33)、この程度で「重罪」という言葉が用いられるだろうか。ジョン・T・マシューズ (John T Matthews) は、これが違法な奴隷売買を意味している可能性を、かなりの説得力でもって論じている。マシュー

ズによれば、蒸気船強盗といった理由はサトペンの不在期間が「三ヶ月」にも及んだことと不整合であり、またコールドフィールド氏の信頼を必要とした理由としても十分でない。サトペンは過去ハイチにいたのだから、彼がカリブ海貿易と疎遠でなかった可能性は高いし、「三ヶ月」という帰還と彼が手にした富の大きさを考えれば、文無しであったサトペンが（一八〇七年には既に禁止されていた）国際奴隷取引に手を出した可能性は高い（251-52）。

マッシュューズの推測は、厳格なピューリタンであるコールドフィールド氏の積年の後悔や、彼がその良心が「拒否せざるを得ないような金儲けをする機会を与えた土地を憎んだ」といった文章とぴったりに適合する（AA 209）。また、この件で拘束されたサトペンの保釈証書にコールドフィールドとコンプソン将軍がサインしているという事実は、コンプソン将軍が奴隷制の事実を知っていたかどうかにかかわらず、南部における貴族階級とピューリタニズムが依拠している奴隷制イデオロギーとサトペンの「デザイン」との結びつきを示している（AA 38）。<sup>(6)</sup>

ゆえに、サトペンが南部の人びとの反感を買うのだとすれば、それは彼が非南部的であるからではなく、むしろ奴隷制に依存した白人支配者としてあまりに南部的すぎるせいだろう。無論、当時の南部社会において奴隷制そのものは公然と認められていたわけだが、既に禁止されていた国外との奴隷貿易を堂々とやってのけるサトペンは、奴隷制にまつわる南部人の無意識的な罪悪感を意識化してしまうのだ。サトペンは南部人にとって見知らぬ者でありながら、同時に慣れ親しんだものを感じさせる存在として、まさにフロイトの「不気味なもの」、「抑圧されたものの回帰」となっていると言えよう（Freud 147-48）。逆に言えば、コンプソン氏やコールドフィールド氏は、彼を取り込むことで彼をより南部人「らしく」し、再度の抑圧を試みているのである。

## 5 媒介としての南北戦争、審判者としてのクエンティン

南北戦争中、南軍を支持する詩を書いていた「桂冠詩人」（AA 6）であるローザが、奴隷制を擁護する南部イデオロギーと結託していたことは明らかだろう。彼女は良心の呵責に悩む弱い父を否定して、むしろ積極的に南部イデオロギーを支持していた。だが、ローザの幻想としてのロマンスが依拠する南部と、サトペンの計画（デザイン）が専有する南部を単純に同一視することは避けねばならないだろう。上述のように、サトペンという存在は南部奴隷制において抑圧された罪悪感を喚起するものであった。一方、中世騎士物語のような典型的なロマンスが階級制度を忌避するどころか前提とし、そこに美徳や物語性を見出すように、ローザの南部ロマンスにおいて奴隷制の罪が問われることはなかったと考えられるからだ。ローザにとって南北戦争は勇敢なる南軍兵士たちが北軍を打ちのめす一種のロマンスとして受け止められたであろうし、敗戦でさえも、本論第二章の終わりに引用したように、力強く生き残る「愛と信頼」という肯定的な意味付けを彼女によって与えられている。ゆえに、南部性という単一のイデオロギーに包摂された二種類の幻想——本論はそれを「愛」と「人種」という言葉によって峻別したいのだが——がロー

ザの内で結びつくためには、やはりサトペンによる「侮辱」こそが決定的な瞬間であったと考えざるを得ないのである。より詳細には、南北戦争において兵士たちを美化するローザの意識が（おそらく自分のデザインを守るという利己的な目的に動かされていたにすぎない）サトペンの「勇敢さ」を南部ロマンスにおける英雄的な振る舞いとして捉えたがゆえに、彼女はサトペンによる求婚を一度は受け入れることができた。しかしながらサトペンは当然、彼女の考えるような「紳士」ではなかったのであり、サトペンによる侮辱はローザのロマンスを打ち砕き、彼女を人種的な南部へと突き落とす。先述したように、ローザのロマンティックな南部が依拠する奴隷制がサトペンという勇敢な男を生み出したのならば、彼女が旧南部的なロマンスに固執すればするほど、そのようなロマンスを台無しにしたサトペンのイデオロギーもまた批判し難いものになってしまう。南北戦争という媒介を通じ、ローザにとっての南部の意味がサトペンの南部へと接続されていると言えるだろう。

身動きのとれないローザの空間はしかし、クエンティンが招かれることによって開かれる。サトペンは決して紳士とは言えない、つまり十分に南部的ではないが、十分に南部的な男とは、サトペンのように奴隷と女を搾取する存在である——サトペンを否定する言葉が必然的に肯定の言葉となってしまう状況において、ローザは自分自身を判断するための距離をもって語ることができない。だからこそ、ローザは新しい世代の南部人としてのクエンティンを、彼女の物語の単なる聞き手としてのみならず、「審判者」(the judge) として必要とするのだ。

*I will tell you what he did and let you be the judge. (Or try to tell you . . . It can be told; I could take that many sentences, repeat the bold black naked and outrageous words just as he spoke them, and bequeath you only that same aghast and outraged unbelief I knew when I comprehend what he meant; or take three thousand sentences and leave you only that Why? Why? and Why? that I have asked and listened to for almost fifty years.) But I will let you be the judge and let you tell me if I was not right.* (134-35, underline mine)

その意味では、ローザが自分の物語についてクエンティンに求めている判断とは、彼女が「正しかった」ことよりも、「正しくなかった (not right)」というものだろうと推測できる。それは息子を失い「デザイン」の達成に失敗したサトペンが、それでもなお自分自身の「正しさ」を信じて疑わず、ただ自分がどこで「間違い (mistake)」を犯したのかを知りたいがためにコンブソン将軍に自らの半生を語ったのと、真逆になっている (AA 215)。

『アブサロム!』を読む者は、クエンティンを前に「哀れなオールド・ミスとして」語り始めるローザが、自分が「淑女」になれなかったことについていかにも尤もらしい理由をいくつも、聞き手の考えを先回りするようにあげながら、同時に何度も「自己弁護をするつもりはない」と

くりかえす行為に、矛盾したものを感じる。しかしながら、ローザは既に、自らがサトペンの南部に順応的であったことを自覚している。ローザは「男を取り逃がしたスピンスター」という共同体の男たちから見た自分の姿を叙述することから逃げず、「弁解しない」(No. I hold no brief for myself [4412, 128]) と繰り返し述べることで、こうした男性権威に組みしてきた自分自身のロマンティックなイデオロギーをクエンティンに対して赤裸々に突きつけているのである。

### 結論

本論では、ローザの語りにおけるロマンスと人種のダブル・バインド状況を指摘し、それが南北戦争を通じてサトペンとの関係によって如何にして生じたかを分析した。批評家はしばしば、サトペンとローザとの間に、イノセントな性質やトラウマ的体験への執着、強固な意志といった相同関係を指摘してきた (Lazure, Poirier, Rollyson 107-44)。実際、無垢な個人的幻想において前提とされていた「人種」というファクターがトラウマ的経験を引き起こす要件となる、という点において、ローザとサトペンの経験を相同的に捉えることが可能だろう。白人のプランテーションオーナーとプア・ホワイトの子供との間に差異は存在しない、というサトペン少年のイノセントな幻想は、同じくイノセントな仕方で、白人と黒人との間の人種的差異に関してはそれを無批判に受け入れていたと考えられる。なぜなら、白人は黒人よりも優れているがゆえに平等である、ということがサトペンの個人的な幻想において前提されていたからこそ、「黒人」の小間使いによって白人プランテーションオーナーの家から門前払いを食うという経験が、彼の幻想を打ち砕くトラウマ的なものとなりうるからだ。同様に、紳士と淑女の物語としてのローザの南部ロマンスは、女性を性的・人種的に分類する男性中心主義と奴隷制に依拠することで成立している。しかしながら、南北戦争と南部の敗北をロマンティックな物語として読み替え、勇敢に戦ったサトペンに南部ロマンスの英雄像を重ねあわせたローザが、そのサトペンによって性を担うだけの奴隷のように扱われるという経験をする時、奴隷制は、彼女のロマンスの基盤であり同時にそれを破壊するものでもある、というダブル・バインドとなるのである。

ローザという個人が特異であるのは、共同体が与える幻想——本論の文脈においては南部ロマンスであり、奴隷制であり、人種主義や性差別でもある——をあまりにイノセントに信じ、それをまるで自分自身が生み出した幻想であるかのように生きてしまうところだろう（この点においてもローザとサトペンは類似していると言える）。この強固な個人的幻想が、南北戦争という歴史を通じて変質した共同体において唯一変わらないものであったからこそ、彼女はグロテスクな存在として共同体の目に映るのであり、その意味でローザを、自らの身を持って南部というイデオロギーの矛盾を示す「症例」と見做すことも可能だろう。ここに、クエンティンの役割の意味を再考する手がかりがある。ローザの物語の聴き手としてクエンティンが召喚されるということ、女性であるローザが立ち上がるためには男が必要なのだという、フォークナーのややミソジ

ニックな視点の表出として考えることもできるかもしれない。しかし、「なぜ僕に話すのだろう」というクエンティンの疑問に対して、やはりミソジニックな語り手であるコンプソン氏が「かつて、我々南部の者たちが女を淑女へと仕立てた。それから戦争が起こり、淑女を亡霊に変えてしまった。だから、我々が紳士として、亡霊たる彼女たちの話を聞く以外に、一体何ができるだろう」(AA 7-8)と答えているように、南部に生まれたクエンティンは、ローザという患者の聴き手となってその意味を解釈する分析医の役を負っていると考えられるだろう。

ではなぜクエンティンが適役なのか。それは、転移／逆転移を通じて分析医が患者と物語を共有するように、ローザのトラウマ的な語りを聞くクエンティンもまた『アブサロム！』という物語を通じて、旧南部的なロマンティシズムに支えられた近親相姦の禁忌という幻想が、同じく南部的なイデオロギーとしての人種混淆によって打ち碎かれる、というトラウマ的な経験へと誘われるからである。ここに、フォークナーがサトベン物語を創り上げるにあたって、ローザという語り手を登場させたことの意義を求めることができる。『アブサロム！』がローザの語りによって始まり、ローザの独白を中心に置き、彼女によるサトベン屋敷への侵入によってクライマックスを迎えるという形式的な特徴に明らかなように、サトベン物語を包摂して、ローザは小説中ただ一人、南北戦争を挟んだ南部社会を実際に生き抜いた女性として、共同体の歴史の生きた証となっている。クエンティンはローザの物語を聴くことで、南部という歴史と現実を、自らも生きることができるのである。その意味で、ローザこそ『アブサロム！』における南部なのだ、と言えるのかもしれない。

## 注

- (1) 「サトベン物語がクエンティンの精神において父と子の関係と結び合わされることは、驚くにあたらない」とデビッド・ポール・レーガン (David Paul Ragan) が述べているように、『アブサロム！』における父子関係というテーマは、サトベンとクエンティンというペアの分析を通じて探求されやすい (104)。リチャード・ポワリエ (Richard Poirier) は、ローザの独白で構成された第5章の分析に際して、「ここで強調されるべきなのはクエンティンなのであって、ローザも[彼女の語りにおける]サトベンも小説の劇的中心とは成り得ない」と念を押している (11)。他方で、フェミニズム批評家たちは男性的な物語と批評のパラダイムに回収され得ない、ローザの周縁的な立ち位置を指摘している。例えばジェニー・ジェニング・フォレスト (Jenny Jennings Foerst) は、コンプソン氏とクエンティンの物語の真実性を疑わない一方でローザの語りの真正さを無視する「広く蔓延した批評の偏見」(38)を批判しているし、ミンローズ・C・グウィン (Minrose C. Gwin) は「ローザ・コールドフィールドと彼女のヒステリカルな声は南部父権制の男性的ディスコースの境界外に留まる」と述べている (*Feminine* 60)。しかしながら、こうした批判をさらに一歩進めて、ではなぜローザの語りがフォークナーによって作品に組み込まれる必然性があったのか、と問うてみる必要があるだろう。
- (2) ローザの「ジュエディスの結婚はまったくなんの理由もなしに禁じられました」(AA 12)という発言をひいて、クリアンス・ブルックス (Cleanth Brooks) は「ミス・ローザは明らかに何が起こったかを理解していない」と述べている (“History”195)。
- (3) サトベンの誕生が1807年、物語の現在が1909年である。

- (4) 文中の引用は R. Dale Parker. *Absalom, Absalom!: The Questioning Fictions*. Boston: Twayne, 1991. p.81.
- (5) 例えばこの作品とも関連の深い『響きと怒り』では、処女性とは旧南部の完全性と結びつく。寺沢242-45参照。
- (6) 上述の「重罪」という言葉やコールドフィールド氏の良心に関する記述以外にも、テキストには「取引」と奴隷制との関係をほのめかすような記述が多数散見される。こうした諸点に関する個別の分析は、藤平321-344を参照。また、これらの諸点から当然推測されるであろう結論にコンプソン氏があえて気がつかない点にも、サトベンの「取引」が南部白人男性のイデオロギーにおいて抑圧されるべきものであることを示しているといえよう。

### Works Cited

- Brooks, Cleanth. "History and the Sense of the Tragic: *Absalom, Absalom!*." *Faulkner: A Collection of Critical Essays*. Ed. Robert Penn Warren. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, Inc., 1966.
- . "The Poetry of Rosa Canfield [sic]." *Shenandoah* 21 (1970): 199-206.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!* 1936. New York: Vintage, 1990.
- Foerst, Jenny Jennings. "The Psychic Wholeness and Corrupt Text of Rosa Coldfield, 'Author and Victim Too' of *Absalom, Absalom!*." *Faulkner Journal* 4.1-2 (1988-89): 37-53.
- Freud, Sigmund. *The Uncanny*. Trans. David McIlintock. New York: Penguin, 2003.
- Gwin, Minrose C. *The Feminine and Faulkner: Reading (Beyond) Sexual Difference*. Knoxville: U of Tennessee P, 1990.
- . *Black and White Women of the Old South: The Peculiar Sisterhood in American Literature*. Knoxville: U of Tennessee P, 1985.
- Kauffman, Linda S. *Discourses of Desire*. Ithaca: Cornell UP, 1986.
- Lazure, Erica Plouffe. "A Literary Motherhood: Rosa Coldfield's Design in *Absalom, Absalom!*." *Mississippi Quarterly* 62.3-4 (2009): 479-96.
- Matthews, John T. "Recalling the West Indies: From Yoknapatawpha to Haiti and Back." *American Literary History* 16 (2004): 238-62.
- . *The Play of Faulkner's Language*. Ithaca: Cornell UP, 1982.
- Muhlenfeld, Elisabeth. "Shadows with Substance and Ghosts Exhumed: The Women in *Absalom, Absalom!*." *Gale Author Handbook: William Faulkner*. Ed. Leland H. Cox. Detroit: Gale, 1982. 249-66.
- Poirier, Richard. "'Strange Gods' in Jefferson, Mississippi: Analysis of *Absalom, Absalom!*." *William Faulkner's Absalom, Absalom!* Ed. Elisabeth Muhlenfeld. New York: Gerald Publishing, 1984.
- Ragan, David Paul. *William Faulkner's Absalom! Absalom!: A Critical Study*. Ann Arbor: UP of Michigan, 1987.
- Rollyson, Carl. *Use of the Past in the Novels of William Faulkner*. Ann Arbor: UMI Research Press, 1984.
- 諏訪部浩一『ウィリアム・フォークナーの詩学』、松柏社、2008年。
- 藤平育子『フォークナーの幻想：「アブサロム、アブサロム！」の真実』、研究社、2008年。
- 寺沢みずほ『民族強姦と処女膜幻想：日本近代・アメリカ南部・フォークナー』、御茶の水書房、1992年。